

文京学院大学経営学部における 初年次導入教育の現状と課題

—学生の満足度を高める規定要因分析—

新 田 都志子

はじめに

1990年末以降、18歳人口減少の中で入試形態も多様化し多様な学生が入学してくるようになると従来の大学教育だけでは対処できない様々な問題が顕在化し、多くの大学で初年次教育の必要性が認識され実施されるようになってきた。

本学経営学部でも2000年度よりチューター制度が導入され、1年次22-23名を1クラスとして、専任教員がチューターとなる少人数の導入教育が始まった。当時の導入教育の主たる内容は、学習の指導、勉学の方法、レポート作成方法や個人的な悩みの相談等で、2002年には「大学学」という名前で単位化された。その後、2008年度より学部内に初年次教育委員会が設置され、一クラス14-15名で編成された「大学学」は、導入教育として位置づけられ、学部長を除く経営学部専任教員全員がクラスアドバイザーとして担当し、現在に至っている⁽¹⁾。

委員会が設置されたとはいえ、2008年、2009年はこれまでの教育を踏襲し、内容はある程度統一するもののその方法や詳細なプログラムは各教員の個性に委ねられていた。しかし、教員全員で行うため、教員のバックグラウンドが様々で指導するスキルや意欲のバラツキが見られ学生に不公平感が生まれた。そのため、2010年度よりほぼ統一したプログラムで行うように変更し、具体的には各クラスの標準化を図るため、実施内容により中～大人数で行う講義形式とクラス別教育を分離するようになった。主要なスタディスキルは特定の教員が講義形式で行い、各アドバイザーの個性は個別プログラムで発揮してもらうことにした。このことにより、各クラスの標準化という問題は、効果・効率両面で一定の成果が出たものの、本学経営学部の特長であった少人数教育の良さが半減し、教員と学生との接触が少なくなったことや講義担当以外の教員の当事者意識が希薄になるなどの課題が残された。

本稿の目的は、上述した2010年度の成果と反省を踏まえ試行錯誤の末実施した2011年度の「大学学」の結果を考察し、今後の課題を抽出することである。授業の最終週に行った学生アンケートを基に現状のプログラムを評価し、学生の満足度を高める規定要因を明らかにする。

本稿は以下のように構成されている。第1章では2010年度の成果と残された課題について触れ、第2章では2011年度の実施内容、第3章で調査結果の考察を示し、最後に今後の課題

について検討する。調査の結果から導入教育の満足度を高めるためには、何よりも教員との距離の近さ、親近感が重要であるとの結論に至った。

1. 導入教育の目的の明確化－2010年度の成果と課題

これまで導入教育である「大学学」においては、初年次教育で必要とされる多く内容を盛り込んできたが、2010年度は「大学学」を下記のように位置づけし、ガイダンスやキャリア教育と明確に区別することとした。

- ① 自校教育…………… 入校式・学外研修
- ② オリエンテーション・ガイダンス…………… 学外研修・**大学学**
- ③ キャリア教育…………… **大学学**・職業とキャリア（後期講義）
- ④ スチューデントスキル…………… **大学学**
- ⑤ スタディスキル…………… **大学学**
- ⑥ 情報リテラシー…………… **大学学**・講義内
- ⑦ 専門教育導入…………… **大学学**・講義内
- ⑧ 教養ゼミ・総合演習…………… **大学学**

この中で、2009年度までの内容と異なるのは、専門教育導入のプログラムを設定したことである。具体的には、各分野から10人の教員が15分程度で「ファーストフード」をテーマに講義を行った。そうすることで一つの事象でも学問の領域によってそれぞれ視点が異なることを感じてもらい、経営学を学ぶ意義や楽しさを早期に発見してもらいたいと思ったからである。

また、冒頭に述べたように、各クラスの標準化を図るため、初めて実施内容により中～大人数で行う講義形式と小人数のクラス別教育を分離して実施した。具体的には、ノートの取り方やレポートの書き方等、主要なスタディスキルは特定の教員が講義形式で行うようにした。詳細なカリキュラムは表1の通りである。

最終週に実施した学生アンケートの結果から、大学学は大学へ慣れるためには大変有効であり、少人数教育や担任制に対する肯定感が非常に強い。ほとんどの学生が5月には大学に慣れたと回答した（表2参照）。図書館ガイダンスを従来通り組み込んだが、実際に必要となれば質問もでき、その都度図書館職員によるガイダンスが実施されているため特に大学学の中で行う必要はなく入学直後のガイダンスで行う方が好ましいことがわかった。スタディスキルズに関しては、ノートの取り方についての要望が多い。特に時期を早めてほしいとの意見が多く、ノートを取れないことが大学の授業についていけない原因の一つと考えられ、時期、方法の検討が必要であることが示唆された。レポートの書き方と実践については賛否両論であった。非常に役に立ったとの意見も多数あったが、分量や他の授業との兼ね合いがあり、この時期に教え、書かせることが最適かどうか議論が必要となった。

2010年度の新たな取り組みとして導入した専門教育導入のオムニバス方式による講義「経

「営学総合講義」は平均値は3.70だが、分散が大きく、やる気のある人とない人との差が最も出た。

表1 大学学 カリキュラム 日程表 (2010年度)

☑…全員を集めて実施, ☑…数クラス1組で実施, ❶…担当教員ごとに実施

講…講義担当 教…教科書該当章番号

第2回～第4回はクラスによって異なります。

#1	4/15	☑ ガイダンス 【仁愛ホール】	① 学部長挨拶 講 オリエンテーション ② 大学とは 講 キャリア教育 スチューデントスキル ③ 学生生活上の注意 講 スチューデントスキル
#2	4/22	☑ 図書館ガイダンス 【図書館, CTR5】	講習に情報収集 (教5章・6章)・情報リテラシーを追加 資 [情報収集・情報リテラシー] + 図書館職員 [検索] スタディスキル 情報リテラシー
#3	5/6	❶ ☑ E-portfolio ガイダンス 【CTR1, CTR2, CTR3, CTR4, CALL1, CALL2, CALL3, B812】	① B812にて生活リズム [週間計画表]・ライフプラン [計画表・チャ レンジ目標]の指導 教1章 資 ② キャリア教育 スチューデントスキル ② PC教室にてE-portfolioの入力方法を指導し、実際に 入力 資
#4	5/13	☑ ノートテイキング 【B406】	ノートテイキングの方法を指導 教2章 講 スタディスキル ※第4回終了後に各クラスでレポート課題のテーマ設定
#5	5/20	☑ レポートの書き方① 【仁愛ホール】	文章の要約 (教4章) レポート課題の意義, 取り組み方 (教8章)の指導 講 スタディスキル
#6	5/27	❶ 面接①	① E-portfolioに基づいて面接を実施。 ② 面接のない学生は、各自図書館等でレポート課題に関する情報収 集 教5・6章 スタディスキル
#7	6/3	❶ 面接②	
#8	6/10	❶ レポートの書き方②	クラスごとに学生のレポート進捗状況の確認 (中間指導の実施) スタディスキル
#9	6/17	☑ レポートの書き方③	レポートの形式面および注の入れ方の指導 (教9章) 講 スタディスキル
#10	6/24	☑ 経営学部で 学習する意義①	専門教育導入 総合演習
#11	7/1	❶ 各担当教員による プログラム①	各教員によるプログラムの実施
#12	7/8	❶ 各担当教員による プログラム②	
#13	7/15	❶ 各担当教員による プログラム③	
#14	7/22	☑ 経営学部で 学習する意義②	専門教育導入 総合演習
#15	7/29	❶ まとめ・伝達事項等	定期試験について、夏休み中の生活について、 9月実施の面接についてなど

表2 アンケート結果（2010年度）

n=209

質問項目	5点評価平均点
1. 大学学は友人づくりに役に立った	4.0
2. 大学学は大学へ慣れることに役立った	3.7
3. 大学学は不安の解消に役立った	3.5
4. 少人数制のクラスは良かったと思う	4.2
5. 担任制は安心感がある	4.2
6. 担任との面接は有意義であった	4.2
7. 担任の先生には今後も何かあったら相談にのってもらいたい	4.1
8. 半年では短い。ゼミに入るまで続けて欲しい	3.6
9. ポートフォリオは大学生活を始めるにあたって役に立った	3.1
10. ポートフォリオで小さな目標を立てることは良いことだ	3.4
11. ノートの取り方の授業は役に立った	3.3
12. レポートの書き方の授業は役に立った	3.7
13. 教科書や資料は役に立った	2.9
14. 教員ごとに行った最終3回のプログラム	3.8
15. 経営学総合講義は全体的にみて有意義であった	3.7
16. 経営学総合講義によって自分の興味ある分野を発見できた	3.3
17. 大学学で得るものは多かった	3.9
18. 総合的にみて大学学は良かった	3.9

しかし、当初このプログラムに否定的であった教員側から、時期については要検討だが早めに何らかの形で経営学部の学習内容の全貌を見せることは、早期に専門科目に興味を持たせる上で非常に重要であるのではとの指摘を得られたのは大きな収穫であったと言える。

その他では、テキスト⁽²⁾については最も評価が低かった（2.92）。この点は他の授業でも同様であるが、テキストの内容ではなく使用箇所が少ないことへの不満が大きかった。同時に教員側からも内容的に経営学部での利用にそぐわない点があるなどの指摘もあった。今後はより適合したテキストを選定する必要がある。

自由回答でアドバイザーの先生に対する感謝の気持ちが多数書かれていた。結論としては、15回の授業で多くの内容を欲張って実施しても成果は出にくい。もう少し、狙いを絞り、緩やかなスケジュールで落伍者を出さない教育が必要である。学生は教員との接触を求めており、クラスの標準化という問題を多少犠牲にしても少人数での授業が好ましいと言える。アンケート結果を真摯に受け止め、もう一度大学学の原点に戻り少人数ならではの教育を目指すことが重要であると結論付けられた。

2. 2011年度の取組み

2010年度の成果と反省、残された課題を踏まえ、2011年度は、主たる目的を大学への慣れ・定着、人間関係の確立とその維持およびこの時期に必要な最小限のスタディスキルの習得とした。詳細なカリキュラムは表3に示す通りであるが、2010年度との主な相違は、自己学習やプレゼンテーション、ディスカッション等の口頭発表、図書館の利用や文献探索、レポートの書き方等は各教員が独自で行うプログラムの中で実施することにした点と前年度は中～大クラスで実施していたスタディスキルズを各クラスで行ったことである。教員との接触を重視し、適切なコミュニケーションが取れるようにするため、オフィスアワーやメールでのアポイントの取り方について解説、実践する機会を設けた。さらに、2011年は、東日本大震災の影響で入学直後の宿泊研修が中止になったことで先輩学生と接触する機会が減少したため先輩学生と対話できるプログラムを導入した。一つは、先輩学生によるパネルディスカッションであり、もうひとつは先輩学生をコーディネータ役として実施したグループワークである。前者はクラスアドバイザーの教員の3,4年生のゼミ生を中心に事前に1年生から質問を受け付けておき、その質問を中心に双方向のやり取りをしながら進めた。後者のグループワークについては以下詳細を記述する。

現在、大学で学ぶための基礎的な技術や技法である、いわゆるアカデミック・スキルズを学生に習得をさせることはもちろん、大学に対する社会的な要請として、学生が社会に出た際にすぐに通用する社会人基礎力の養成についても求められている。コミュニケーション能力や問題解決能力、他者と協調・共同して行動できるチームワーク力、他者に方向性を示し、目標の実現のために動員できるリーダーシップ力等を大学時代に学生に身につけさせなければならない。これらの力を早めに意識させることを目的にグループワークのプログラムを計画した。アドバイザーの教員が学生と面接を行う裏で、面接に該当しない学生に経験が豊富な4年生（一部3年生）をコーディネータ役として行ったものである。したがって当日は教員が関与せず、全てを先輩学生で行った。これは、副次的な効果としてコーディネータになった先輩学生自身の気づきや学びも得られ、1年生にとってはグループワークの実践と同時に先輩学生との交流を図ることもできた。

具体的には、クラスを3つに分け1つのグループは面接+電子ポートフォリオ⁽³⁾の作成、残りの2つのグループはグループワークとし、3週間で順に回していくようにした。つまり、一人の学生は2つのグループワークを経験したことになる。グループワークのテーマ、方法に関しては担当学生と話し合いを重ね3つのプログラムを実施した。各プログラムの目的、内容は表4の通りである。また、巻末に実施概要や課題、振り返りシート、実施報告書の一部を掲載しているので参照されたい。実施後は毎回振り返りシートの記入をしてもらおうと同時にコーディネータ役の学生から状況を報告してもらった。各クラスアドバイザーの教員にグループワークの成果物と振り返りシートを配布するとともに、全員で結果を共有できるように教員の

控室にコピーを置いておくようにした。

表3 2011年度大学学カリキュラム

回数	日付	内 容 (会場が記載されていない場合、時間割表記載の教室にて実施)
1	4月21日(木)	ガイダンス(全クラス合同・仁愛ホール) ①大学学とは何か ②ポートフォリオの意義、記入方法
2	4月28日(木)	大学での講義の受け方 ①さまざまな講義の形態 ②ノートテイキング ③成績評価の仕組み
3	5月12日(木)	面接(15分×5人×3週) ①面接+ポートフォリオ入力 (配当PC教室) ②グループワーク
4	5月19日(木)	
5	5月26日(木)	
6	6月2日(木)	教員との接触 ①オフィスアワー、研究日等の説明 ②電子メールによるアポイントの取り方 ③言葉遣い、マナー
7	6月9日(木)	文章の書き方
8	6月16日(木)	(教科書:中山秀樹『ほんとうは大学生のために書いた日本語表現練習帳』すばる舎、2010年10月。[ISBN 4-883999-61-3])
9	6月23日(木)	
10	6月30日(木)	先輩学生との対話(パネルディスカッション)3クラス合同 ①学生生活の過ごし方(2・3年生) ②就職活動について(4年生)
11	7月7日(木)	各担当教員によるプログラム(1)
—	7月14日(木)	(16日に振替)
12	7月16日(土)	てっぺんフォーラム
13	7月21日(木)	各担当教員によるプログラム(2)
14	7月28日(木)	各担当教員によるプログラム(3)・大学学のまとめ

これらのグループワークを通じて、学生はグループで協力しながら仕事をしていく時の自分や他者の行動の仕方、リーダーシップやコミュニケーションのあり方を学ぶことができたと言える。さらに、メンバーの振りかえりから以下のようなことが気づきとして示唆された。

- ① 自分自身の行動やメンバーからの指摘を通じて自分自身を深く見つめ直す、他者との関係や自分の傾向の確認。
- ② グループで協力し、他者と協調・協働して行動することの重要性の理解。
- ③ 自ら問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を解決する力。
- ④ 自分をふりかえる力、人間関係を豊かにする力。

情報共有の重要性や双方向のコミュニケーションプロセスのあり方、リーダーシップ行動の生まれるプロセスの理解などを早い段階で学ぶことにより、二次次からのキャリア教育への橋渡しがスムーズに行える。また、中にはゲームという遊び感覚でグループワークを行うことで、メンバーと簡単に打ち解けて行えるところもメリットであると思われる。それぞれの性格や行動の特徴などを理解することができ、メンバー間のコミュニケーションやリーダーシップの醸成に非常に役立った。

表4 グループワーク概要

	目的	内容
第1回	① チームの中での情報の分かち合いを学ぶ ② チームの中でのメンバー相互のコミュニケーション過程を学ぶ ③ チームワークの重要性について学ぶ	コミュニケーションゲーム：5人（4人）ひと組になり、各人が持っているバラバラの情報を統合し、研修センターの見取り図を作成する（市販のものを使用）
第2回	① 要約力、図解化する力を身につける ② 自分の意見を述べ、他者の意見を聞き、理解する力を身につける ③ チームワークの重要性を学ぶ ④ 発表する力の養成	5人（4人）ひと組になり、各人が別々の新聞記事を要約したうえで、全体のテーマを決めて内容をディスカッション、要約。模造紙に図解化して発表
第3回	① 既存の枠組みを打破することの難しさを知ること ④ ブラン・ドウ・チェックの重要性に気づくこと ⑤ 自分の適性を知ること	トランプを使った新しいゲームを考え、ゲームのマニュアル（手順書）を作成し、発表する。

3. 導入教育に関する調査と分析

前期の授業の最終日に通常の授業評価とは異なる「大学学に関するアンケート」を行った。これは前述したように昨年から実施しているものであり、授業内容の目的と内容に関する評価を中心に今後の問題点や課題などを明らかにすることが目的である。

方法は、自記式のアンケートで授業の最終日に教員が配布し無記名で答えてもらった。主な内容は、1. 大学学の授業内容の評価、2. 大学生活の現状（入学当初の不安と現在）、3. 来年度へ向けての課題である。

3.1 授業の評価と学生の満足度を規定する要因

今回実施したカリキュラムについて18項目からなる質問を行った。調査内容は、大学学の目的、カリキュラム内容を「少人数制」、「担任制」、「先輩との関わり」、「大学への慣れ」、「スタディスキル」の5つの領域に分け、各質問項目とも、5点（全くそう思う）～1点（全くそう思わない）の5段階評価で回答してもらった。単純集計の結果は表5のとおりである。

結果からおおむねカリキュラムに関しては好意的な評価を得ていることがわかる。特に少人数による担任制に対しては高い評価で大学に入学直後の不安定な状況を取り除くのに役だったと同時に、これからの学生生活においても担任という存在を重要視していることが伺える（質問項目5,6,7）。

次に「大学学の評価を規定する基本的な要因とは何か」を明らかにするために、16の質問を探索的因子分析により少数の評価指標に分類し、授業全体の満足度を規定するのはどのような評価項目か、またそれらのウエイトはどの程度かについて分析した。因子の数は第4因子までで累積寄与率62.1%に達したため、4つの因子で判断した。因子分析の結果は表6のとおり

である。各項目の各因子に対する因子負荷量から、各因子の持つ意味を解釈し、それぞれ因子 1：【アットホーム】、因子 2：【新しい学び】、因子 3：【安心感】、因子 4：【スキルの獲得】と命名した。

導入教育である「大学学」の評価を規定する基本因子は、教員や仲間に恵まれ自分の居場所を確認できアットホームであること、新しい学びへの不安や期待、不安を解消し大学へ適応できること、大学生としての新たなスタディスキルの獲得の 4 つであることがわかった。

これら 4 つの評価スケールが大学学全体の満足度とどのように関わるのかを明らかにするため、次に重回帰分析を行った。従属変数は大学学の満足度（質問項目 17、5 点評価）で、説明変数は因子分析の結果得られたの 4 つの因子である。説明変数間の相関は表 7 に示す通りで無相関であるためこのまま用いることとした。

表 5 大学学の内容およびプログラムの評価

n=224

質問項目	5 点評価平均点
1. 大学学は友人づくりに役に立った	4.1
2. 大学学は大学へ慣れることに役立った	3.9
3. 大学学は不安の解消に役立った	3.7
4. 少人数制のクラスは良かったと思う	4.2
5. 担任制は安心感がある	4.3
6. 担任との面接は有意義であった	4.1
7. 担任の先生には今後も何かあったら相談にのってもらいたい	4.2
8. 半年では短い。ゼミに入るまで続けて欲しい	3.6
9. ポートフォリオは大学生生活を始めるにあたって役に立った	3.1
10. ポートフォリオで小さな目標を立てることは良いことだ	3.3
11. ノートの取り方の授業は役に立った	3.4
12. 文章の書き方は今後役に立つと思う	3.8
13. 教科書や資料は役に立った	3.4
14. 教員ごとに行った最終 3 回のプログラム	3.8
15. グループワークは有意義だった	3.8
16. 先輩学生の話聞いたのは有意義であった	4.0
17. てっぺんフォーラムの話は今後の大学生生活に役立ったと思う	3.6**
18. 総合的にみて大学学は良か	4.0

** 質問項目 17 は参加者のみ

表6 因子分析結果

n=207

	因子1	因子2	因子3	因子4
固有値	3.015	2.998	2.473	1.450
寄与率	18.8	18.7	15.5	9.1
累積寄与率	18.8	37.6	53.0	62.1
1 友人作り	0.7860	0.1835	0.2431	-0.020
4 少人数制	0.7904	0.1359	0.2700	0.0845
5 担任制の安心感	0.6572	0.0587	0.2633	0.4316
6 担任との面接	0.6243	0.1271	0.2350	0.3920
9 ポートフォリオは役に立った	0.1835	0.7820	0.1470	-0.0608
10 ポートフォリオで目標を立てる	0.0581	0.8165	0.1073	0.1672
11 ノートの取り方	0.1804	0.7010	0.2282	0.3865
13 教科書や資料	0.0514	0.5695	0.3951	0.1350
2 大学への慣れ	0.3697	0.3528	0.5821	0.1151
3 不安の解消	0.3802	0.3604	0.6358	0.1397
8 ゼミに入るまで継続	0.2942	0.1455	0.6789	0.1438
14 教員ごとのプログラム	0.3614	0.2857	0.5759	0.3547
12 文章の書き方	0.1451	0.4711	0.1991	0.6197
13 担任の先生に今後も相談したい	0.4328	0.0283	0.4467	0.4634
15 グループワーク	0.3903	0.3120	0.2289	0.3147
16 先輩学生との対話	0.2265	0.3900	0.3831	0.1616

表7 説明変数間の相関

	因子1	因子2	因子3	因子4	従属変数
因子1	1	-0.00041	0.140829	0.068781	0.536839
因子2	-0.00041	1	0.088337	0.064105	0.32386
因子3	0.140829	0.088337	1	0.098884	0.587408
因子4	0.068781	0.064105	0.098884	1	0.280671
従属変数	0.536839	0.32386	0.587408	0.280671	1

重回帰分析の結果は表8の通りである。自由度調整済み決定係数は0.667、重相関係数も0.817と高く十分説明力があると言える。5%水準で統計的にも有意であった。この重回帰分析より初年次教育の中でも大学に入学してすぐに行う導入教育に関しては、因子1（アットホーム）

と因子3（安心感）が強く、新しい学びやスタディスキルの獲得よりも教員がひとり一人の学生に対して親身になって面倒を見、フレンドリーな態度で接することで満足度が高まることがわかる。入学当初の1年生が教員に求めるものは、親しみやすさや話しやすさ、雰囲気の良さであり、専門性ではない。自由回答では教員に対する親近感について多くの学生がコメントを寄せていた。⁽⁵⁾ゆえに、担当の科目は問題ではなく、専門科目の教員であっても語学や教養、芸術の教員であっても担任としての力量とは全く関係ないと言える。ひょっとしたら担任は教員でなく職員であっても良いのかもしれない。高校から大学へとスムーズに移行させるためには、いかに学生を新しい環境の中で適応させ、自立させるかであり、学生がスムーズな移行を行うには、十分な準備と継続的なサポートが教員側に必要であることは言うまでもない。教員との良好な関係性を構築することで、授業の準備、授業への参加、ノートの取り方、学習習慣などについてもアドバイスを得ることができよう。

その上で、さらに満足度を高めるためには、ポートフォリオの改善やスタディスキルズに関する教育の改善が必要であると考えられる。さらに、今回の分析で明らかになったのはコミュニケーション力を高めるために実施したグループワークや今後の学生生活に対する目標や指針作りとして提供した先輩学生との懇談が4つの因子とは無関係であったことである。とはいえ、全体的な満足度との相関を調べたところ、グループワークとの相関係数は0.526、先輩との対話は0.520とそれぞれやや高い傾向にあり、この2つのプログラムも満足度と関係がないわけではない。実施した主観的な感想になるが、前期の段階ではまだゼミや就職活動などは将来の話として漠然と聞いたり、受け取っていると考えられる。内容そのものは評価されているため、実施する時期や他のプログラムとの関連性を考え検討しなければならない。

表8 重回帰式結果

説明変数	偏回帰係数	F値	T値	標準誤差	有意差判定
因子1 [アットホーム]	0.45165	123.412	11.109	0.040656	**
因子2 [新しい学び]	0.26377	43.6099	6.60378	0.03994	**
因子3 [安心感]	0.51455	135.4132	11.6367	0.04422	**
因子4 [スキルの獲得]	0.19889	20.2847	4.5039	0.04416	**
定数項	4.00966		109.5884	0.03659	

決定係数 $R^2 = 0.66677$ 自由度調整済み決定係数 $R^2' = 0.66017$

3.2 クラスの編成と内容の要望

大学学のクラス分けについては、従来は専攻に関係なく全体を等分し編成していた。⁽⁶⁾しかし、コンテンツ系の教員よりコンテンツを学ぶ目的で入学してきた学生に対しては早めに適性を見極め指導したいとの要望があり、この2年間は専攻別にクラス編成を行い、担任も各専攻と関

係する教員が担当してきた。一方、学生、教員双方から現状のクラスという枠組み⁽⁷⁾での大学学の編成を希望する声もあった。そのため、アンケートで聞いてみたところ、クラスと運動させることを希望するものはわずか3.7%で当初の予想と反して従来のクラスとは異なるメンバーでグループを編成することを希望していることがわかった。クラスという既存の枠組みではなく新しい友人関係を築くことに対するポジティブな意識が見てとれる。

次に、今回行った内容の他にどのようなプログラムを望んでいるのか聞いてみた。12のプログラム内容の中から希望するものを3つあげてもらったところ、最も多かったのはレポートの書き方189人であり、次いで先輩との対話(94人)、グループワーク(84人)となった。前述したように先輩との対話とグループワークの2つは、今回満足度を測る指標とはならなかったものの個別のメニューとして今後も続ける価値はある。

他には経営学部の専門科目の紹介も72人(35.3%)から実施した方が良いとの回答が寄せられた。前章でも述べた通り、「レポートの書き方」と「専門科目の紹介」は昨年実施したものの今年も目的を絞って行ったことから中止にしたプログラムである。レポートの書き方については、前期中に必修科目である「経営学」と「経済学」の担当教員よりレポート課題が出されたことも影響があったと思われる。今回は、1年生には学習サポートセンターを利用するように指示を出したものの、次年度からは再度検討する余地があるし、必修の専門科目を担当する教員からレポート課題についての情報を初年次教育の担当者が掴んでおく必要がある。このような専門科目の教員との情報交換や連携も今後の課題として残された。ノートの取り方も含め一定のスタディスキルズについてはニーズが高く、いつ、どのタイミングで、誰が教えるのかについて今後検討する必要がある。

逆にニーズが低かったものは、図書館ガイダンス、大学内施設案内、地元散策等でこれらは導入教育としては必要を感じていないことが伺える。

3.3 入学当初の戸惑いや不安

大学に慣れた時期についての質問では7月の段階で9割以上の学生が既に慣れたと回答し、時期については殆どの学生が5月の中旬までを挙げていた。大学に入学後抱えた不安や戸惑いについて回答してもらい、またそれをどう乗り越えたかについても自由回答で回答してもらった。

大別すると、学業に関すること、人間関係、高校生との生活の相違、将来への漠然とした不安の4つがあげられる。学業に関しては大学ならではの履修の仕方や授業時間の長さ、授業の受け方やレポートなどのスキル、成績評価が挙げられた。これらの問題についての対処としては大学学のアドバイザーの教員や教務の職員、先輩へ聞くことで殆どが解決されている。授業の長さや大学ならではの授業スタイルについても最初は戸惑ったものの時間の経過とともに解決できていた。しかし、レポートの書き方についてはまだ対処できていないとの回答が多かった。

次に人間関係、とりわけ親しい友人ができるかどうか大きな不安だったことが多くの学生から挙げられた。もちろんこの点に関してはいつの時代であっても大学入学後の大きな不安要素である。これまでは入学直後の宿泊を伴う研修旅行が友人作りの場となっていた。しかし、2011年度は東日本大震災の影響で中止となったことから、とりわけ友人作りに関しては不安が大きかったと推察される。この点をどう乗り越えたかについて、多くの学生が大学で友人ができた⁽⁸⁾と回答していた。今回可能な限りアドバイザーの教員による少人数授業にしたことやグループワークを取り入れたことによりメンバー間でコミュニケーションする機会が多くなり、結果、通常のクラスを超えた友人関係ができたと思われる。当初震災による研修旅行中止の影響を懸念していたがあまり問題がなかったことがわかった。

また、自由回答により明らかになったことだが、入学前から既に一部の学生がSNSでコミュニティを形成しており、そこに参加していない学生が疎外感を持っていたことである。恐らく入学前教育で知り合った者同士がコミュニティを作っていたと考えられるが、近年、高校生が積極的にSNSを利用していることを考えれば、逆に入学前から大学側も積極的にSNSを取り入れて不安の解消に役立てる方法も今後模索する必要があるかもしれない。

その他、高校生との生活や生活時間の違い、将来への漠然とした不安に関しては、前者は時間が解決し、後者は後期に始まるキャリア教育との連動の中で解決していかねばならない。

4. 結びにかえて

2010年度に実施した導入教育の成果と反省を踏まえ、2011年度は、狙いを絞り、緩やかなスケジュールで行うこと、学生は教員との接触を求めているのでクラスの標準化という問題を多少犠牲にしても少人数での授業が好ましいこと、もう一度大学の原点に戻り少人数ならではの教育を目指すことが重要であるとの結論のもとカリキュラムを作成、実施した。

結果は、大学への慣れや定着、高校からのスムーズな移行という当初の目的は概ね達成したと言える。また、学生への調査の結果から初年次教育の中でも大学に入学してすぐに行う導入教育に関しては、新しい学びやスタディスキルの獲得よりも、アットホームな雰囲気と安心感の醸成が強く満足感と関係しており、教員がひとり一人の学生に対して親身になって面倒をみることで満足度が高まり早期に大学生活に慣れることが明らかになった。アドバイザーの教員に求められているのは、1年生の時点では専門性よりも親しみやすさや相談のしやすさといったキャラクターが重視されていることも自由回答により明らかになっている。

一方、前年に実施したものの、上述のような反省から今回実施しなかったレポートの書き方や経営学総合講義なども要望が多く上がった。この点は今後詳細な検討が必要であろう。この時期に学生が大学での目標を明確にできるような支援と、専攻を希望する分野の研究水準や内容についてある程度知っておく必要がある。

大学への慣れや友人関係の拡大と学生生活の充実、教員との適切なコミュニケーションが取

れることなどの学生生活の基盤を充実させることとスタディスキルの獲得という両輪をいかに半期間という短い時間の中でやりくりしていくのか、それとも別の時間で行うのが相応しいのか。すなわち、初年次教育を導入教育だけに終わらせず学士課程教育の中でどのように位置付け、カリキュラム化していくのかについて今後の課題として残された。また、アドバイザーの教員に求められる資質を全ての教員が持っているわけではない。そこで、例えば、フレンドリーな教員とスタディスキルを教えることが得意な教員とキャラクターの異なる教員同士が組んでクラス対応することも今後検討の余地があるかもしれない。

学生をより大学に適應させ、スムーズに移行させるには、教員側からのサポート、および大学側の組織的サポートと学生自身の適應努力という双方のアプローチが不可欠である。本学経営学部は教育学や国語の専門家がいない中での導入教育の試行錯誤の繰り返しであり、今後も時代に合わせてさらに検討を続けていく必要がある。

(注)

- (1) 本学経営学部における導入教育のこれまでの流れや概要に関しては絹川、森宮、新田（2009）を参照されたい。
- (2) 学習技術研究会編著『知へのステップ』、くろしお出版を使用。
- (3) 電子ポートフォリオに関しては絹川、森宮、新田（2009）を参照されたい。
- (4) 詳しくは別紙資料「大学学に関するアンケート」参照されたい。
- (5) ○○先生は親しみやすく話やすかった、面接が楽しかった、話しやすい先生で良かったなど多くの学生が教員の性格や雰囲気について自由回答で述べている。
- (6) ただし、男女の比率、併設校出身者の偏りがないように編成された。
- (7) 本校の場合、1年生を6つのクラスに分け、1年次の必修に関してはこのクラスで受講するようになっている。したがって、学生の中では「クラス」が一つの集団であり、懇親会を行うなどインフォーマルな組織として働いてる。
- (8) 入学前教育はAO入試、推薦入試で合格した学生に対して12月、2月に2回集合で行われる。一般入試で合格した学生に対しては行っていない。

参考文献

絹川直良・森宮勝子・新田都志子（2009）、「経営学部における初年次教育の課題—電子ポートフォリオ導入と教育法の検討—」、『文京学院大学総合研究所紀要』、第10号、p.165-189、文京学院大学総合研究所。

絹川直良・新田都志子・海老原論（2010）、「経営学部における学士課程教育の展開」、『文京学院大学総合研究所紀要』、第11号、p.89-103、文京学院大学総合研究所。

Barkley, E.F., K.P. Cross, & C.H. Major (2005), *Collaborative Learning Techniques: A handbook for college faculty* (安永悟監訳 (2009), 『協同学習の技法』 p. vii, ナカニシヤ出版。)

B・G. デイビス、香取草之助監訳（2002）、『授業の道具箱』、東海大学出版。（原著1993年）

参考資料ー使用した一部を掲載ー

【参考資料 1-1】 大学学 第2回グループワーク課題

初年次教育委員会

新聞記事を一枚ずつ各自が読んで要約し、記事内容からわかったことを全員で1つにまとめ、模造紙に書く。

手順

1. 各自1枚新聞記事をとる
2. 各自記事を読みプリントにまとめる（15分）
3. グループで情報を共有し記事をまとめる
4. まとめたものを模造紙にわかりやすくまとめる。まとめ方は自由。図解化するのによし。
5. 模造紙にはまとめ全体の「タイトル」（キャッチフレーズ）をつけ、メンバーの名前、大学学のクラス担任名を書く

3～5を45分で終わらせること。

6. 各グループの出来上がりの観察（8分）
7. 振り返りシートの記入（10分）
8. 全体講評（3分）

【参考資料 1-3】

大学学 第3回グループワーク

2011年5月26日
初年次教育委員会

第3回グループワーク

1. 課題

トランプを使った新しいゲームを考え、ゲームのマニュアル（手順書）を作成し、発表する。

2. 課題の背景

防災用品を入れておく非常持ち出し袋には事務的でデザインが良くないものが多い。そのため家庭では目につかないところに置かれることが多いが、それではいざという時に役に立たない。阪神大震災当時小学生だった立命館大学の学生が部屋に出しておいてもおかしくないというコンセプトでティベアのぬいぐるみのリュックに入れた防災用品（防災クマさん）を企画し、発売したところ大ヒットした。

この商品はそれだけでなく、実は大人が考え付かないようなグッズが中に入っている。それは「トランプ」。彼が体育館での長い間避難生活を送っていたときに一番困ったのは遊びがないこと。その記憶から中に大人も子供も電気がなくても簡単にゲームが楽しめるトランプを入れたという。しかし、既存のゲームでは種はつきてしまう。そこで、トランプ一つで楽しめる新たなゲームを企画してみよう。



防災クマさん

10種類の防災グッズ入り ぬいぐるみ+

飲料水(480ml)、トランプ、カロリーメイトロングライフ(賞味期限約2年)、携帯トイレ、マスク、軍手、ラジオ付きライト(電池付き)、非常用ブランケット、ホイッスル、オリジナル蓄光腕章
価格 9,800円

3. 準備するもの

- ①企画書 (36 枚)
- ②マニュアルの作成用紙 (36 枚)
- ③下書き用紙 (各チーム×4 枚 144 枚)
- ④振り返りシート (人数分 約180 枚)
- ⑤トランプ (各1つ 36 個)

4. 手順

- ① 主旨の説明 (時間を板書する) 3分
- ② ゲームの企画、マニュアル作成 60分
- ③ チーム別発表 3分×4チーム 12分
- ④ まとめ、講評 3分
- ⑤ 振り返り 10分

5. 提出物

- ①企画シート
- ②マニュアル
- ③振り返りシート

【参考資料 1- 5】

第1回（5月12日実施）グループワーク結果報告

第一回目のグループワークの結果をご報告します。今回は24枚の情報カードを用いて研修センターの見取り図を完成させ、研修を行う教室を推測するコミュニケーションゲームを行いました。最後に出席代わりに書いてもらったふりかえりシートと各グループの完成図をお届けします。

振り返りシートは5分ほどの時間の中で書かせたものですので、書ききれていない学生もおりますが、おおむねチームワークの重要性や情報の共有化の必要性、他者の理解など、当初予定していた目的を理解している学生が多いように見受けられます。

たかだか数行のコメントの中に学生の資質や持っているポテンシャルも若干ですが伺えます。気づきのあった学生も一定数以上おり、自分を振り返る上での良い時間になった学生もおりました。一方、中にはおそらく自分の意見が通らず攻撃的になっている学生や非常に子供っぽい学生も見受けられます。問題のありそうな学生には面接でのご指導をぜひお願いいたします。

第二回目は新聞記事を用いて情報の集約や要約、まとめる力を身につけるためのグループワークを行います。各人が新聞記事を読み、一人ひとりが要約したうえで、全員で一つのテーマにまとめ上げるものです。もちろん、チームワークや協調性などを身につけるのも目的です。テーマは震災後の消費者の買い占めなどの問題や影響を扱うつもりでいます。

来週、再来週につきましてもご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

◆ 配布資料

1. 課題用紙
2. 手順書
3. 情報カード一覧
4. 振り返り用紙
5. 完成した見取り図および正解

課題や情報シート、正解も配布させていただきましたので、ご参考ください。

以上

【資料2】

大学学に関するアンケート

アンケートは両面です。記入漏れがないよう注意してください

このアンケートは、来年度の「大学学」の授業をより良くするために、皆さんから意見を聞き、今後役に立っていくためのものです。後輩達のために是非率直で建設的な意見をお願いします。全て統計的に処理しますので、個人が特定されることはありません。

5	4	3	2	1
大変そう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	全くそう思わない

I. あなたの考えに最もよく当てはまる回答に○をつけてください。

- | | | | | | |
|-------------------------------|---|---|---|---|---|
| 1. 大学学は友人づくりに役に立った | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 2. 少人数制のクラスは良かったと思う | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 3. 担任制は安心感がある | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 4. 担任との面接は有意義であった | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 5. ポートフォリオは大学生活を始めるにあたって役に立った | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
-
- | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 6. ポートフォリオで小さな目標を立てることは良いことだ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 7. ノートの取り方の授業は役に立った | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 8. 文章の書き方は今後役に立つと思う | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 9. グループワークは有意義だった | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 10. 教員ごとに行った最終3回のプログラム
(プレゼン、レポートなど)は有意義であった | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
-
- | | | | | | |
|---------------------------------|---|---|---|---|---|
| 11. 教科書や資料は役に立った | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 12. 大学学は大学へ慣れることに役立った | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 13. 担任の先生には今後も何かあったら相談にのってもらいたい | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 14. 大学学は不安の解消に役立った | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 15. 半年では短い。ゼミに入るまで続けて欲しい | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 16. 先輩学生の話を開けたのは有意義であった | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 17. 総合的にみて大学学は良かった | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

